

「事実」としての「奇」と「危」

——江見水蔭の「実地探検」群を手がかりに——

熊谷昭宏

はじめに

硯友社出身の江見水蔭は、明治二八年頃から、いわゆる冒険・探検小説や探検記の類を書き始めた。それらの多くは、明治三三年から自身が主筆となった博文館の雑誌「少年世界」に発表された、架空の人物（多くは少年）たちが繰り広げる冒険活劇を描いたものである。ところが一部の探検記には、水蔭自身が友人らを伴って行った「探検」の様子を描いたものも見られる。そのような探検記では、作者の「実地」の「探検」が描かれるということが、繰り返し強調される。「少年世界」の「記者通信」などの外部情報も、探検記が作者＝水蔭の「実地」に基づくことを読者に保証していた。^①そして、水蔭の探検記における「実地」の描写は、「事実」の描写として語り直されていくことになる。明治四〇年、このような「実地」を売

り物にした、水蔭の三作品集が刊行された。『実地捕鯨船』実地奇窟怪嶽実地海竜窟探検である。^②いずれも「実地探検」の四字を角書に冠している。『探検海竜窟』には架空の冒険・探検を描いた小説も収録されているが、その他二つの作品集はどれも水蔭とその周辺人物の「探検」を描いた明治三〇年代前半初出の探検記群により構成されている。

さて、明治四〇年という年に注目すると、前年「事実の人生」^③において小説と「事実」の関係を説いた田山花袋が、「新小説」九月号に「蒲団」^④を発表している。翌四一年初頭には、明治四〇年文壇を回顧して、「自然主義」「自然派」の〈勝利〉を宣言する文章が多く見られる。^⑤〈勝利〉の内実はさておき、ともかく小説史を語るうえで重要とされるそのような年に、「実地」と「事実」を強調した明治三〇年代前半の「実地探検」群を水蔭が世に問うたことには、

注目してよいだろう。この年、最盛期を迎えつつあった自然主義小説と、文壇ではほとんど話題にならない探検記とが、「事実」の二語を交点として奇妙な交差を見せたのである。この状況をさらに踏み込んで眺めてみると、一体どのような問題が浮上するのだろうか。一見小説界の主流とは無関係のような、水蔭の探検記における「実地」「事実」の問題が、花袋らが「勝利」に導いた自然主義小説の前提条件を、逆照射することになりはしないだろうか。

本稿では、江見水蔭の探検記群と同時代評の分析から、「事実」を書く際のモラルのようなものがどのように理解されていたのかを明らかにする。そのうえで、田山花袋の小説論における「事実」と水蔭の「事実」とをつき合わせ、明治四〇年前後に起きたとされる、自然主義小説（勝利）の一つの前提を示してみたい。具体的な分析対象としては、江見水蔭の『【実地探検】奇窟怪嶽』『【実地探検】海竜窟』に収録された「実地探検」（以後、作家の存在が強調される探検記をこう呼ぶことにする）とその同時代評、そして田山花袋の小説及び小説論が中心となる。

一、「奇」と「危」をめぐる

『【実地探検】奇窟怪嶽』には、奥多摩の日原鍾乳洞探検を描いた「奇窟探検」（【武州鍾乳洞探検記】を改題）、長野県戸隠山の探検記「怪嶽探

「事実」としての「奇」と「危」

検』（【戸隠山探検記】を改題）、日原鍾乳洞「探検」の後日談である「奇窟探検（後談）」（【日原鍾乳洞探検後記】を改題）が収録されている。このうち「奇窟探検」と「怪嶽探検」は、作家水蔭の存在が明示され、「探検」が実際に行われたことが強調される「実地探検」となっている。一方、『【実地探検】海竜窟』で「実地探検」と呼べるのは、「竜窟探検記」^⑨である。水蔭の「実地探検」は、作家水蔭自身を読者に想起させる「余」^⑩が、実際に経験した移動（探検）の様子を語るといふ形式をとる。そのため、紀行文というジャンルに含まれると一応は言うことができるだろう。^⑪

ただ、同時代の一般的な紀行文と比較すると、「余」が目にした光景が「奇怪」なものとして、行動が「危険」なものとして、それぞれ過剰に表現されていることに気がつく。例えば、次にあげる箇所などがその典型例である。

後で人から聴いて見ると、余の墜落した時の音響といふものは非常に大なるもので、大きな岩を数千仞すぢせんの谷底に突落した時のやうな大鳴動がしたさうだ。

（『【実地探検】奇窟怪嶽』より「奇窟探検」）

忽ち叫ぶ前衛の若殿輩「大蛇!!! 大蛇!!!」（略）正しく大蛇!!!

長さ五六丈!!! 太さ二尺余!!! それは大蛇に似たる大きな四明しめい縄なはで、鳥居に懸けたのを取脱とぎはずしてあつたのであらう。

〔「実地奇窟怪嶽」より「怪嶽探検」〕

池の中央ななはまで進んだ時に、彼の岩陰を照らした探暗燈の光!!! 這こは如何に、岩角をぐるぐると巻いて、頭を持ち上げ、此方を睨にらんで将に毒氣どくきを吐かんとしつゝ、あるが如き、大蛇、嗚呼、大蛇。

〔「実地探検海竜窟」より「竜窟探検記」〕

引用は右からそれぞれ、鍾乳洞内部で「余」が滑落した様子、戸隠神社一の鳥居付近でしめ縄を大蛇と見間違えた一行、岩窟内部で蛇の石像を発見した時の描写である。これらの描写が過剰であるのは、「数千すせんく仞の谷底」「大鳴動」等の表現から容易にわかる。「大蛇」の場合は、先に述べたが、実はその場に設置されていた石像であることが「余」自身によって直後に明かされるのである。水蔭以前に戸隠山を描いた明治の紀行文には、山田美妙の「戸隠山紀行」¹²等がある。美妙は「戸隠山紀行」で、戸隠神社一の鳥居を発見した時の感動を、「やうやくにして原の果てに当ッてさ、やかな鳥居を認めた時の嬉しさ」と表現しているが、そこにかかるしめ縄については少しも触れていない。このような比較からも、水蔭の「実地探検」

の表現が過剰であることがよくわかる。引用したのはごく一部分だが、「実地奇窟怪嶽」と「探検海竜窟」の諸篇はこのような過剰な表現に満ちている。

同時代評を見ると、「実地探検」の評価はやはり、「奇」と「危」の表現を肯定する立場と否定する立場に二分されている。「実地探検」に肯定的な評価を与えたのは主に、水蔭の重要な活躍の場である「少年世界」を愛読する少年たちだった。例えば、明治三四年二月、「少年世界」の「読者通信」欄に次のような投稿文が掲載された。

江見水蔭先生の鍾乳洞探検の行を頗る壯と致し固より確然予期せられざるも今年暑中休暇の頃生も同洞探検致し度き所存に有之候（略）
見坊田鶴雄¹³

当時連載中であつた、水蔭の「鍾乳洞探検記」に胸を躍らせる読者の意見である。また、明治三四年一二月、福岡県に住むある少年から投稿された文章は、以下のようなものである。

戸隠山探検記を少し多く書いて下さい、他の面白くもない、小説等はのけてもよいから（略）余り下さい〜と云つた処で駄目ですから之で止めになります
グツドバイ¹⁴

これは、同じく「少年世界」に連載中の「戸隠山探検記」についての要望である。これらの投稿文からわかるのは、「実地探検」の愛

読者（特に少年たち）が歓迎しているのは、想像上の「探検」を提供する、過剰な「奇」と「危」の表現だということである。中には、実際に書かれた「探検」を再現することを企てた人々もいたようである。¹⁵

一方文壇では、彼の「実地探検」や冒険小説・探検小説は、理想的な小説の姿からはかけ離れた、一流作家が世に問うべきではないジャンルとして位置づけられていく。例えば、「武州日原鍾乳洞探検記」連載中の明治三四年三月、「文芸倶楽部」の「無題録」には、

われは（略）其抑へがたき熱血を専ら作物の上に傾注せずして、つまらなき道楽の上に消耗するを惜しまずむばらず。¹⁶

というような水蔭批判が見られる。ここで言われる「つまらなき道楽」とは、水蔭の行う「探検」とそれを描く「実地探検」、そして冒険小説類を含めたものを指すと考えられる。同様の批判は三ヶ月後の「新文芸」誌上にも見られ、水蔭の作家としての才能は、

其文才は人情の機微を穿つに適當なる文才にあらずして、探奇的紀行に適當したる文才なり。されば、水蔭の小説の読者を欲ばすべき点は、単に人の好奇心に投ずる結構に存して、情緒纏綿たる詩の上にあらざるなり。¹⁷

というように説明される。ここでは、「人情の機微を穿つ」文と「探奇的紀行」という対立が設定され、水蔭は後者に長けた作家と

いう位置づけがなされる。

重要なのは、この対立において、両者の差異が「文」としての価値の高低だとされていることだ。評者は水蔭の文才の要点を「単に」読者の「好奇心に投ずる結構」にあるのみとしている。評者は、「人情の機微を穿つ」文と比較した場合の「探奇的紀行」の相対的な価値の低さを示している。先の「文芸倶楽部」での批判文にも、これと同じ対立が暗に設定され、相対的に価値の低いものとして「実地探検」が位置づけられているのである。「人情の機微を穿つ」文とは、水蔭の作家履歴から考えれば、「女房殺し」¹⁸のような「人情」を主軸とした小説であることが容易に推測される。「実地探検」は小説と対置されることで、文学ジャンルの覇権争いという問題に関わることになったのである。

後年の著書『自己明治文壇史』¹⁹で水蔭は、明治三五年の秋から冬頃を振り返り、「次第々に、純文芸と遠ざかりつ、行くのであつた」と述べる。また、『実地探検奇窟怪巖』等の刊行についても、「斯うして益々純文学界からは遠ざかり行くのであつた」と回想している。水蔭は自身の仕事を「純文芸」「純文学」の系列とそこから遠い系列に分類し、「実地探検」を後者に位置付けている。「純文芸」「純文学」の語は、水蔭がそこから「遠ざかりつ、行く」と感じていたことから、明治二〇年代の自身の「人情」小説を指すことは容易に

わかる。²⁹⁾つまり、後に意味づけられたもので、かつ皮肉まじりではあるが、水蔭も「文芸倶楽部」や「新文芸」における批評と同じ論理でもって、自身の「実地探検」を評価しているのである。ただ、本稿では小説と比較した場合の「実地探検」の相対的な価値やその判断の正当性を問題にしたいわけではない。問題とすべきは、そのような価値判断の前提がいかなるものであったかということである。

二、「実地探検」の「事実」

水蔭の「実地探検」に対する批判的な意見は、「探検」を好んで行う人々からも寄せられている。先取りして言うならば、この「探検」者たちによる批判を検討することで、明治四〇年前後にかつての「実地探検」群が「事実」と共に語られることの意味が、明らかになると考えるのである。小島烏水らによって結成された山岳会の初期主要メンバーである梅沢親光は、明治三九年六月、「仙元嶺と鍾乳洞³⁰⁾」という紀行文を雑誌「山岳」に発表している。ここでは、翌年「実地探検奇窟怪嶽」に「奇窟探検」として収録されることになる、日原鍾乳洞探検記」への言及が見られる。

江見氏の墜落したと云ふ岸の上へ出ると云ふので右を行た、その崖は右の道の左手にあつて存外勾配がある墜落等が出来る筈

はない転り落ちても大した傷を負ふ処ではない、江見氏は後に崩れて勾配が出来たのであらう等と云はれたが当時某氏が撮影したとか云ふ絵の様な写真をよく見た上何とも諸君の御推察に任せる、多分墜落した崖と云ふのは他の処なのであらうと信ずるより他はあるまいと思ふ。

右に引用した箇所は、明らかに先にあげた「怪嶽探検」中の、「余」が滑落したエピソードに対応している。さらにこの紀行文は、「実地探検」を批判的に検証するという形をとっている。少年たちの想像力を刺激した鍾乳洞の「奇」と「危」は、梅沢の目には、実際の風景からかけ離れた描写として映ったのだ。

この二年後、「山岳」には、「山岳図書批評」として「実地探検奇窟怪嶽」の書評が棲碧と苦瓠の署名で掲載された。³¹⁾そこで棲碧は、本格的な登山を経験したことがない水蔭らが、探検隊を率いる滑稽ささを指摘する。そして、描かれる「出来事も随分意外なる所」があり、「此頃流行の探検、冒険アダベンチャーの小説と、対比すべき」ものであると同書を位置づける。苦瓠の方はより痛烈に、以下のような批判を行っている。

自分は事実を楽しまんが為にこの一篇を読だもの、一人である。
(略) 冒険小説として見たらば或は名著であるかも知れないが
事実を書た実験の直写としては頗不満足な不忠実なものと云は

ざるを得ない。(略)戸隠山探検は一篇の好御伽噺だとの事故これも恐らく事実では無いのであらう、(略)江見氏が戸隠山に登つたとの事の外何程まで事実かは知りがたい。

結局、「実地探検」は「冒険小説」として位置づけられるのである。ここでも、「実地探検」がいかなるジャンルであるかを示すことが、一つの問題となっている。しかし苦瓠の批評は、これまでの「人情の機微を穿つ」小説対「実地探検」という単純な価値の対立を再説するものではない。

注目すべきは、繰り返し用いられる「事実」という語であろう。評者苦瓠がことさら「事実」にこだわるのは、水蔭自身による序文に原因がある。『探検実地奇窟怪嶽』の「序」は次のようなものである。

此篇の如き、決して誇るに足るべき著作ならねど、空想の産物にあらずして、実験の直写なるだけに、聊か江湖に示すに足るべきか。余をして法螺を吹くを許さしめば、(略)奇々怪々の文章を草じ得べけれど、そは余りに幼稚にして、余の成し得ざる所なり。読者よ、事実を楽しみ給へ。

水蔭は「空想の産物」「法螺」「奇々怪々の文章」に対して「実験の直写」を置き、「実地探検」の価値が後者によって保証されると述べる。そして、「実験の直写」から読者が読み取るものが、「事実」であるとするのである。「山岳」の苦瓠は、この序文と本文の内容

「事実」としての「奇」と「危」

との矛盾を指摘しているわけである。近代登山を信奉する「山岳」の評者たちの立場からすれば、山岳や鍾乳洞、江の島の岩窟の「奇」は全て自然科学の言葉で説明可能であり、「危」は装備と技術、正確な知識によって軽減されるはずのものであっただろう。いわゆる名所での「探検」ならば、なおさらである。

それでは、「山岳」において否定された水蔭の「事実」とは何だったのか。『探検実地海竜窟』の「序」には、江の島の岩窟を「探検して見て、余りに奇怪極まりないので、それで書く気になつた」という執筆動機が記されている。これは作品集の中でも特に「竜窟探検記」についての記述であることは明らかである。文字通り「実地」の「探検」であることの宣言であり、これが「事実」の一つの根拠となっている。「竜窟探検記」にも、「事実」という語や「事実」性を強調する記述が時折見られる。例えば、「竜窟」の有無同様、そこに棲むという「海蛇」(実際はウツボ)の存在を疑う読者を想定し、それを捉えたということが述べられた後で、

それをアルコールの瓶に密封して、そして一個は現に余が宅に保存してある。一個は動物学士の某氏に贈つて、説明を乞ふた。という記述が挿入されている。愛読者なら水蔭として読み進めるであらう「余」が、「海蛇」の標本を「現に」保管しているというのである。また冒頭近くでは、「竜窟」を「五年前に島遊げんした尾崎紅

葉石橋思案の両氏」が「轟の窟」と命名したというエピソードも紹介される。「現に」「余が」という表現と、読者に馴染のある固有名詞の使用は、『探検奇窟怪嶽』の「序」にある、「読者よ、事実を楽しみ給へ」という、読みの指針の提示とも呼応するだろう。同時にこれらの表現は、「実地」＝「事実」の約束を危うくする陥穽を、適宜穴埋めする機能も引き受けている。

水蔭の「実地探検」における「事実」を理解する別の手がかりとしては、三つの「実地探検」集が刊行された明治四〇年発表の、『探検小説作法』²³という小論もあげられる。そこで水蔭は、

探検を為さんには、科学上の知識がなくてはならん（略）鎌倉江の島などお姫様やハイカラ連の遊興に出掛ける土地でも、之を科学的に検べに行けば即ち探検である

と豪語する。「探検小説」の「作法」を示したものであるが、「探検」の定義を述べており、「実地探検」の作法として読むことも可能である。ここで水蔭は、ある行為が「探検」であるか否かを決定するのは、「探検」地ではなく、「探検」者の「科学上の知識」の有無であると主張している。「科学上の知識」の程度については、水蔭自身の様々な疑問を投げかけることができよう。しかし、「科学的に検べに行」く姿勢により、目的地が「探検」地として現出するという約束事は、「実地探検」の「事実」の在り方を考える

場合、重要となる。ある視点からの記述によって、目的地の風景は変容することになるのだ。そして、目的地を「検べに行」く者の行動を描写するために、「奇」と「危」を描くのに適した記述が選択されることになるだろう。もちろん、この選択により、書かれたものが冒険「小説」や探検「小説」に接近することにもなるだろう。その意味においては、『探検奇窟怪嶽』を「冒険小説」と位置づけた「山岳」の書評は、当を得ていたといえる。

こうしてみると、水蔭の主張する「実地探検」の「事実」が、「山岳」の書評で問題とされた「事実」とは異なるということがわかる。「実地探検」において「事実」とは、「探検」の内容が読者によって隔々まで実証可能であるということではない。それは、「実地」と「科学」という保証を得た「探検」者が語るといふ形式そのものを指すのである。よって、「事実を楽しみ給へ」とは、そのような約束事を受け入れれば、胡散臭い「探検」者の語りも「楽しむ」ことができる、という読者へのメッセージであると考えられるのである。²⁴

三、「事実の人生」と「事実」の「探検」

ところで、語りにおける「事実」性は、同時代の田山花袋の小説論でも主要な問題であった。明治三十九年一〇月、「新潮」に発表さ

れた「事実の人生」は、田山花袋の執筆活動だけでなく、日本の自然主義文学の展開を語る上で、常に重要視されてきた小説論である。^⑤
「事実の人生」では、

小説を書くには、実際自分が遭遇した事とか、親しく関係した事とか、モデルがある方が好いでせう。(略)「重右衛門の最後」ですか？ あれは全く那通りの事があつたので、現に私は其を見ました。そして見た通りを正直に大胆に書いたのです。

(略) 私の作った所は少しもありません。

というように、小説において「事実」を描くことの重要性が説かれる。またこの後の部分では、花袋が目撃した「那通りの事」の情報をもとに、水蔭が「十人斬」という小説を著したことも明かされている。花袋の「事実」と水蔭「十人斬」の「事実」との比較は、ここでは踏み込んで行わない。^⑦

花袋は、小説が「深い価値のある作品」であるために、「実際自分が遭遇した事」などの「モデル」を得て、「見た通りを正直に大胆に」描くことが必要だと説く。その早い実践例が「重右衛門の最後」^⑧だというのが、このほかにも「事実の人生」では、翌月の「文芸倶楽部」で発表されることになる小説「秋晴」^⑨が別の例として紹介される。彼の「家に居た事がある」一書生が逃げた「非常に悲惨な死」をめぐるエピソードを、「ソツクリ書いたもの」が「秋

「事実」としての「奇」と「危」

晴」であると、花袋は述べる。「秋晴」は、長野県上水内郡三水村の出身者を「モデル」とした作品群に属する。「事実の人生」には、それらを「一冊に纏めて其村の名でも冠せて出版するつもりなので」とあり、「事実」を描いた小説の一つの系が想定されていたことがわかる。「秋晴」は翌明治四〇年に作品集「草籠」^⑩に収録されるのだが、その「序」には、「此集に収めたものは、比較的事実を忠実に書いたものだ」という断りがある。さらに明治四一年に刊行された作品集「村の人」^⑪では、「秋晴」は収録されていないが、「モデル」の村を訪れたという「事実」のエピソードが示され、やはり、「其村の人々にも逢ひ、出来事をも見、物語をも聞いた」という収録諸篇の「モデル」についての注釈がつけられるのである。「事実の人生」と合わせてこれらの序文を読むと、花袋が明治四〇年前後にとっていた、小説を書く者としての身振りのようなものが垣間見えてくる。その身振りとは、「モデル」が存在することと、それを「見た通りを正直に大胆に」書くことを宣誓することである。ここである類似に気づく。花袋のこの身振りは、水蔭が「実地探検」を書く際に見せるそれと、奇妙な一致を見せるのである。ここでは、この類似の起源として、花袋と水蔭との親しい関係を再発見することは目指さない。そうではなく、花袋の小説論を相対化する材料として、水蔭の「事実」認識を捉え直すことにする。表現のレ

ベルで比較すると、「空想の産物」ではなく、「実験の直写」であり、読者に「事実を楽しみ給へ」と胸を張る『実地奇窟怪獄』「序」の言い回しは、そのまま「事実の人生」等に転用することが可能なほどである。花袋も水蔭も「事実」の有無、つまり「事実」が描けているか否かを、作品の成否を判断する基準にしている。換言すれば、序文や解説などで作品の「事実」性を語る事が、その作品の価値を保証することになるのだ。

また花袋は「事実の人生」で、「モデル」とする人物をよく「観察」し、「変つた特異の点」を見出してそれを描くべきだとも述べる。この場合描かれるのは、「観察」の結果新たに発見された「事実」だと言うことができよう。また、同時代の長谷川天溪らの表現を借りて、これを「暴露^③」と言うことも可能だろう。だとするならば蔭が江の島や日原鍾乳洞、戸隠山の「奇怪」かつ「危険」な側面を描き出そうとする時、そこには花袋が「モデル」に対する場合と同様の、対象への関り方が見られるのではないだろうか。花袋の小説論は、人生には隠された「特異な」「事実」というものが必ず存在する、という前提の上に成立する。そして、小説集の序文における「観察」Ⅱ「暴露」という手続きの表明は、書かれる「事実」が「特異」であることを保証することになる。一方水蔭の「実地探検」では、探検する土地には、常に「奇怪」「危険」が存在することが

前提となっている。「竜窟探検記」では、先に引用したように、蛇の石像のありさまを描き出すために、かなり過剰な表現を重ねている。だが、そんな過剰な表現者である「余」も、「探検」の前段階では、「竜窟」に関する江の島周辺の噂話については、

それ、川瀬が居るの、それ、蝙蝠が居るのと、種々の風説はあ
るけれど、素より其奥の奥を突留めた上で、真を語るのではな
い故に、いづれも信用は出来ぬのである。

と、自身の「科学」的実証精神を強調する。ここでは「実地」の「探検」という手続きの表明が、「奇」と「危」の「事実」性を保証しているのだ。

また、花袋の小説と水蔭の「実地探検」ではどちらも、「科学的」知識が「観察」や「探検」の正当性を下支えしているということも、忘れてはならない。「実地探検」における「科学的」知識の必要性は、先に引用した「探検小説作法」で示される通りである。花袋は明治四二年刊行の『小説作法^④』で、現実のある土地を「モデル」として描く際には、「其舞台の特色が分明^{はつき}と出て来るやうに研究」することや、「地理学上からこれを見ても、峡谷中の民と高原の民と平野の民と都会の民と皆な其発達習慣気分が皆な違ふ」ということに注意すべきであると述べる。花袋は小説を書く上で、「モデル」となる「舞台」、つまり土地の「研究」が必要であると初学者たち

に説く。「研究」と「観察」の後に判明するのが、土地毎に異なる「特色」である。この「特色」は、論の中では、その土地に住む、「モデル」としての人々の「特色」の存在を語るために導き出されている。「事実の人生」等の文脈を考慮すれば、土地毎の「特色」という、「観察」||「暴露」すべき「事実」が前提としてそこにあり、「観察」||「暴露」に正当性を与えるのが「地理学」という「科学」の知識なのである。

こうしてみると、花袋が新たな「作法」として定着させようとした小説の「事実」は、いくつかの前提条件の上に成り立つ、一つの約束事であったことがわかるだろう。前出の『小説作法』には、「想像と事実」と題した文章も収録されている。そこでもやはり、小説における「事実」の重要性が力説されている。だが、その中で次のような興味深い説明もなされる。

小説を書くに就いて、可成想像を排するを第一とするのは、私の主張である。けれど想像が悉く無用であるといふやうなことは私は言はない。(略) 想像——小説に用ゆる者の想像は、飽まで正確なものでなくてはならぬ。数学的計算と官能的感觉と正確なる経験を基礎としたものでなくてはならぬ。(略) 事実に近い想像——それ以外に今の作者は想像に用がない。

花袋は、「事実」が絶対普遍の何かであることを信じて疑わない。

「事実」としての「奇」と「危」

しかし、小説においてその何かを描くことの不可能性には当然気づいていた。そのため、小説における「事実」が「事実」と呼ばれるための条件を定める必要があったのだ。花袋はあくまで「事実」と「事実に近い想像」を峻別しようとする。しかし、「見た通りを正直に大胆に」書いたはずの「重右衛門の最後」における重右衛門の、「口惜くつてく、忌々しくつてく」以下に続く、人生を呪う内面描写は明かに「見た通り」を超越している。恐らく、この内的発話に至るまでの文脈と、「遺伝」や「地理」などに関する知識がこの描写を成立させているのだろう。だが、これは間違いなく「事実」に近い想像、ある条件により「事実」性を保証された「想像」である。既に指摘されていることだが、「蒲団」以前の花袋の小説では、山間部を旅する人物が登場し、悲惨な「事実の人生」を語るという役割をするものが多い。語り手は、旅をすることで、「奇」と「危」に満ちた「事実の人生」を見出す。水蔭の「実地探検」「作法」に照らしてみれば、そういった小説の語り手による分析や旅は、一面では、山村における「探検」と呼べるはずである。

一見すると、花袋が主張する「事実」は、雑誌「山岳」で『「実地探検」 奇窟怪嶽』の「事実」を虚偽として退けた評者たちの「事実」観の側にあるかのである。しかし実際には、「実地探検」と花袋の小説論は、人生や風景の「奇怪」「危険」「非凡」を語るものとして、

同じ基盤の上に成立している。明治四〇年前後、突然思い出したように水蔭が主張した「事実」観は、確かに苦し紛れともれそである。しかし、その「事実」観は、我々に対して、彼の朋友花袋が文壇にアピールしていた小説の「事実」の在り方を、別の角度から照らし出す。両者の間には、決して「想像」から「事実」へという〈進歩〉があつたのではない。またこの問題は、中心化されつつあつた自然主義的小説と見かけ上周縁化されつつあつた「実地探検」という、ジャンル間の覇権争いとは別に考えなければならない問題なのである。

おわりに

自然主義の言説によつて高まつた「人生」を描く小説の価値、その価値を支える前提条件は、様々な批評が差異化し再「配置」したはずの「実地探検」と、見事に共有されていた。周縁化は、あくまでも見かけ上のものであつた。明治三〇年代から書かれ読まれていた「実地探検」が、自然主義小説のあり方を用意していたという表現も、あるいは可能かもしれない。だが、そのような文学史の書き換えを試みることも、短絡的だろう。明治四〇年前後から数年は、小説界において「事実」という二文字が重要な批評用語として流行した時期であつた^①。小説一般を論じる場合はもちろんのこと、ジャ

ンを横断して批評の場で「事実」が流通し、時に価値決定に用いられたとしても、不思議ではない。だからこそ、「実地探検」において、水蔭が「事実」を争点にすることを再確認し、自然主義陣営と同一の批評用語を媒介としたために、両者の間に相互作用の可能性があつたことを指摘する方が重要だろう。

そして水蔭と花袋は「事実」を標榜しつつ、どちらも実際には、それぞれが建前上忌避する虚構性を、いかに弁明するかという問題を抱え込むこととなつた。ただ、結果的には、「事実」であることを主張しつつも、その「事実」性が否定された「実地探検」と、同じ虚構でありながらも、その虚構性よりも「事実」性に注目が集まつた花袋等の小説が、全くの別物として扱われ続けてきたということになる。 「事実」を楽しむ「実地探検」にせよ、「事実の人生」を描く小説にせよ、「事実」を標榜した明治四〇年前後の新「作法」は、文学作品の虚構性に抵抗し、同時に虚構であることを弁明するため、要請されたものだったのである。

注

① 例えば、「少年世界」七・七（明治三四年五月一日）の「記者通信」欄で武田桜桃は、三ヶ月後に連載が始まることになる水蔭の「戸隠山探検記」について、「実行は七月中旬、猛夏の炎暑を冒して、人跡不到の探検地に向はれ候江見水蔭氏は、目下其準備最中に有候、壮快なる大探

検談はやがて本誌に上るべく候」と予告している。

- ② 江見水蔭の三作品集のデータは以下の通り。「実地探検捕鯨船」(明治四〇年四月一六日／博文館)、「実地奇窟怪嶽」(明治四〇年九月九日／本郷書院)、「実地探検海竜窟」(明治四〇年二月五日／自祐社・岡村書店・福岡書店)。

- ③ 田山花袋「事実の人生」(新潮)五・四／明治三十九年一〇月一五日)
④ 田山花袋「蒲団」(新小説)一・二・九／明治四〇年九月一日)

- ⑤ 例えば長谷川天溪「近時小説壇の傾向」(太陽)一四・二／明治四一年二月一日)には、「近時の小説界で何が重要な潮流であるかと云へば、誰人も自然派文学であると答ふる」とあり、「早稲田文学」明治四一年二月の巻(明治四一年二月一日)掲載の「明治四十年文芸史料」冒頭には、「自然主義の潮流は、昨年に及んで遂に文壇の中心問題となり」と記される。もちろん論者や発表媒体により賛否は分かれるが、明治四〇年文壇の最大の問題が自然主義という「潮流」であったという点では概ね一致する。

- ⑥ 初出は「少年世界」六・一三〜七・五(明治三三年一月一五日〜明治三四年四月一日)。

- ⑦ 初出は「少年世界」七・一一〜八・四(明治三四年八月一日〜明治三五年三月一日)。

- ⑧ 初出は「少年世界」七・七(明治三四年五月一日)。

- ⑨ 初出は「読売新聞」(明治三〇年二月三日〜三月二日)。

- ⑩ 「奇窟探検」『五』には、探検隊の任務等のリストが示されるが、そこには「隊長江見」とあり、実作家水蔭の「探検」であることが読者には再確認されるだろう。

- ⑪ 実作者の行った旅行を描く、ということが紀行文というジャンル(特に明治三〇年代半ば以降)の大前提とされていた、ということは、既に

「事実」としての「奇」と「危」

佐々木基成「紀行文」の作り方——日露戦争後の紀行文論争——
『日本近代文学』六四／平成二三年五月一五日)に指摘があり、本稿でもそのような文章を紀行文と呼ぶ。

- ⑫ 山田美妙「戸隠山紀行」(『短編明治文庫』第五編／明治二六年二月二五日／博文館)

- ⑬ 「読者通信」(『少年世界』七・三／明治三四年二月一日)

- ⑭ 「読者通信」(『少年世界』七・一六／明治三四年二月一日)

- ⑮ 例えば「少年世界」七・三(注⑬)の「読者通信」には、水蔭の「実地探検」を読んで「志抑へ難く」なり、単身日原鍾乳洞へ赴いたという読者、橋本弥吉の文章が掲載されている。ただ、これらが全て本物の読者投稿であるという確証はない。ここでは、「実地探検」に好意的な評価を与える場合の評価軸がどのようなものを示す一例として引用した。

- ⑯ 「無題録」(『文芸倶楽部』七・四／明治三四年三月一日)

- ⑰ 黒幕生「水蔭の文章」(『新文芸』一・五／明治三四年五月一日)

- ⑱ 江見水蔭「女房殺し」(『文芸倶楽部』第一〇編／明治二八年一〇月二〇日)

- ⑲ 江見水蔭『自己明治文壇史』(昭和二年一〇月二八日／博文館)

- ⑳ 『自己明治文壇史』の書かれた時期に注目すれば、「純文学」の語は、大正から昭和初期にかけての「大衆文学」の流行を無視できない。だが、そこから「遠ざか」る以前の彼の作品群を考慮すれば、本稿の図式化は妥当であると思われる。なお、明治後期における冒険小説のイメージについては、高橋修が「冒険」をめぐる想像力——森田思軒訳「十五少年」を中心に(『金子明雄・高橋修・吉田司雄編』『ディスクールの帝國——明治三〇年代の文化研究』／平成二二年四月二〇日／新曜社)で言及している。高橋は自然主義小説流行の中、冒険小説に「カウンター・ジャンル」として「特別な位置が与えられ」たとする。

「事実」としての「奇」と「危」

九六

- ⑲ 梅沢親光「仙元嶺と鍾乳洞」(「山岳」一・二／明治三九年六月一日)
- ⑳ 榎碧・苦瓠(「山岳図書批評」『探検奇蹟怪獄』(「山岳」三・一／明治四一年三月三〇日)
- ㉑ 江見水蔭「探検小説作法」(「成功」一・一・三／明治四〇年四月一日)
- ㉒ もちろんこのことは、「実地探検」が虚構ではないということを意味するわけではない。
- ㉓ 吉田精一「自然主義の研究」上巻(昭和三〇年一月三〇日／東京堂出版)をはじめ、多くの研究で、「露骨なる描写」(「太陽」一〇・三／明治三七年二月一日)同様、田山花袋個人や日本近代文学の(「転機」)を示す資料として引き合いに出される。
- ㉔ 江見水蔭「十人斬」(『春夏秋冬』秋の巻／一八九七年一月二日／博文館)
- ㉕ 水蔭「十人斬」と花袋「重右衛門の最後」の比較、問題点の考察は、永井聖剛「二つの「事実」——水蔭「十人斬」と花袋『重右衛門の最後』——」(『日本文学』五二・六／平成一五年六月一〇日)で詳細になされている。本稿で行う比較は「実地探検」という曖昧なジャンルと小説との関係を「事実」という観点から探るものである。
- ㉖ 田山花袋『重右衛門の最後』(アカツキ叢書第五編／明治三五年五月一日／新声社)
- ㉗ 田山花袋「秋晴」(「文芸倶楽部」一・二・一五／明治三九年一月一日)
- ㉘ 三水村とその出身者を「モデル」とした花袋の小説には、このほかに「重右衛門の最後」や「悲劇?」(「文芸倶楽部」一〇・六／明治三七年四月二〇日)等がある。また、花袋と三水村との関係に言及し考察した研究には、岩永胖『自然主義文虚構の可能性』(昭和四三年一〇月二五日
- ／桜楓社)、長谷川良明「秋晴」試論』(『花袋研究学会々誌』一八／平成二二年三月三一日)等がある。
- ㉙ 田山花袋『草籠』(明治四〇年五月二三日／服部書店)
- ㉚ 田山花袋『村の人』(明治四一年二月二五日／如山堂書店)
- ㉛ 長谷川天溪が「現実暴露の悲哀」(「太陽」一四・一／明治四一年一月一日)において、自然主義者の人生や自然主義作品を評する際に用いた「現実暴露の苦痛」等の表現に拠る。
- ㉜ 田山花袋『小説作法』(通俗作文全書第二四編／明治四二年六月三〇日／博文館)
- ㉝ 永井聖剛が注㉔の前掲論文で、既に同様の指摘をしている。
- ㉞ 花袋の小説における旅する語り手の重要性については、宮内俊介「初期田山花袋論——紀行文と小説との谷間——」(『芸文研究』三六／昭和五二年三月三一日)や持田叙子「紀行文の時代」と近代小説の生成——習作期の田山花袋を中心に——(『国学院雑誌』八七・七／昭和六一年七月一五日)等で指摘されている。
- ㉟ この点については、相馬庸郎「事実の時代——明治三、四十年代別見——」(『国文論叢』三一／平成一三年二月一〇日)等に指摘がある。

〔付記〕

旧漢字は適宜新漢字に改めた。また引用にあたっては傍点等を省略し、ルビについても読み方の難解なものを除きこれを省略した。